井伏鱒二隨聞

井伏鱒二随聞

河盛好蔵

新潮社

井伏鱒二随聞

昭和六十一年七月十五日　発行
昭和六十一年八月二十日　二刷

著者　河盛好蔵

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三(二六六)五一一一　振替東京四―八〇八
編集〇三(二六六)五四一一

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

定価一四〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yoshizo Kawamori・Masuji Ibuse, 1986 Printed in Japan

ISBN4-10-306004-2　C0095

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

作家の素顔……九
井伏文学の周辺……二九
緑蔭対談……四五
「山椒魚」まで……六七
夕すずみ縁台話……九九
文学七十年……一三七
自選を終えて……一七七

II

井伏鱒二小伝……一九三
作品ノート……二〇三
「ドリトル先生」ききがき……二三六
名山を見る……二四三
阿佐ヶ谷会のこと……二四六
常に新らしく……二五三
高森訪問記……二五六
荻窪五十年……二六一
あとがき……二六七

井伏鱒二随聞

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作家の素顔

河盛　井伏さんはこのごろずいぶん旅行をされますね。先日は広島でしたか。

井伏　あれは原爆の資料館を見に行ったんです。原爆患者の療養日記や、いろんな人の体験記みたいなもの、二千何百編集めたというんです。

河盛　どうしてまたそういうものを？

井伏　僕は『新潮』へ「黒い雨」書いているでしょう。原爆患者の女の人が子供産んで死んだんです。その親戚の人が療養日記とか、お医者さんのカルテを見て説明を引受けてくれるというので書き出したんです。そうしたら遺族の人が、それより前に、療養日記は見るのも涙の種だって燃しちゃったんです。途方に暮れた。小説も途中で切らなきゃいけないかと思っていたところに、二千何百編集まったって……。そういうことです。

河盛　とても全部は見きれないでしょう。

井伏　ええ。あそこは持ち出せないし。——療養の仕方、発病の仕方、一人ひとりみんな違いますね。知ってる人にもいろいろ訊いたんですが、酒を飲むと、いいという原爆症の小料

理屋のマダムもありました。

河盛　酒が原爆症に効くんですって……？

井伏　速断はできないでしょうけれども、よしたらば亡くなった人があるそうです。マダム自身も視力が弱って来たんですって。いまごろになって。もう二十年ですよ。それでまた酒を飲んでました。

河盛　あなた、あの時は福山でしたね。

井伏　ええ、福山の近在に疎開していました。もう福山も最後だと思って、あのとき福山の町を見に行ったんです。その時刻、芦田川の堤の高射砲陣地のあるところでお弁当食っていたんです。その時はキノコ雲が出ていたはずですが、西の尾道との境に山があるんです。そのために……。少し西の三原からは見えたそうです。遠くから見るとキノコ雲に見える。近くから見た人はクラゲの形だそうです。あの雲は、あまり動かないのですね。そうして西側のほうは大粒の黒い雨が降ったんです。足がクラゲの足みたい。黒い、えんどう豆くらいの雨が……。手についたらシャボンで洗ってもなかなかとれない。それにやられた人はいけないそうです。

河盛　こわいですね。

井伏　こわいです。――いまは原爆記念館のあるところ、楠の森でね、ちょうど若葉で、きれいでした。

河盛　広島からお帰りになってからは？

井伏　あくる日、甲府へ。

河盛　南船北馬というところですね。一年間にずいぶん……。

井伏　今年はそうもしません。

河盛　しかしこの四、五年、月の十日は……。

井伏　以前は、釣りで旅行していましたが、このごろしないです。

河盛　日本国中ほとんど歩かれましたか。

井伏　僕はおんなじところへ行くから、――いつもおなじとこですよ。

河盛　甲府ですね。山梨県があんなにお詳しいのは、どういうわけですか。

井伏　山梨県ばっかり行ったからですよ。なんかあそこは飽きないですね。

河盛　なにかいいことがあるんじゃないんですか。

井伏　いいこともないです（笑）。人と知り合いになったでしょう、釣りの人が多いですからね。あそこは釣りが非常に盛んなんです。

河盛　最初いかれたのも釣りのためですか。

井伏　そうです。宿も東洋館というところばっかり泊まっていましたが、戦争でシンガポールに行って来てからは、梅ケ枝という宿へ行くようになりました。戦争中、甲府市外へ一年疎開しているときも、一週間のうち三日や四日は梅ケ枝という宿へ行ってました。そして太

宰(治)君、野沢純君などと飲んでいたんです、宿屋の帳場で。そこへ行くとヨッちゃんという、三十年勤続の女中がスペシャルという白ブドウ酒を一人に一本ずつ……商売ですけれども。とてもそんなもの普通手にはいらない。それからタバコも、そこのおかみさんの生家は桜桃つくっているんで、鉄砲虫を駆除するために、長年お客のタバコの吸いがらを集めてカマスに入れていた。それをヨッちゃんが灰ふるいでカマスから出してきてくれる。それを僕たちは長ギセルで喫う。キセルで吸殻を喫うことは、昔の不良少年の言葉でゴウケツをやるというんですね。ゴウケツやってたら、一年間にカマス二俵吸った、太宰君と野沢君と僕と三人で(笑)。

河盛　甲州はお酒はどうですか。

井伏　地酒のいいのがありますよ。富水(ふすい)という逸品があった。それからサド屋の白ブドウ酒、これはいいものですね。

河盛　一つの土地を深く、詳しく知ってるほうが面白いでしょうね。あちこちとび歩くより……。

井伏　人がね。風景がよくても、どうも。

河盛　甲州人というのはそんなにいいですか。

井伏　僕のつきあう人はみんないい人のような気がします。疎開していたときのことですが、タバコの配給でタバコ屋の前に行列しますね。すると、お前より俺が先だって組打ちをはじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com